

氏 名 Sally Jill McLaren  
 学位の種類 博士 (社会学)  
 学位授与年月日 2008年 9月12日  
 学位論文の題名 **Approaching Critical Through Media Literacy: Audience Perspectives of Gender, Power and Politics**  
 (メディア・リテラシーにおけるクリティカルな視点の獲得：ジェンダー、権力、政治に関するオーディアンスの分析)

**【論文内容の要旨】**

**1. 本論文の構成**

本論文の目次は以下に示すとおりである。

Chapter 1. Introduction

1. TOPIC: Audiences Research from a Media Literacy Perspective
2. MOTIVATION: From Content Analysis to Audience Research
3. APPROACH: Anti-Area Studies
4. KEY CONCEPTS
  - 4.1 Media Literacy    4.2 ‘Critical’    4.3 Audiences
  - 4.4 Gender    4.5 Power    4.6 Politics
5. AIM AND SCOPE
  - 5.1 Aims of the Research    5.2 Significance of the Research

Chapter 2. Topic Literature Review

1. Media Literacy for Democracy
2. The Necessity for Critical Perspectives
3. Audiences are Citizens
4. Gender and Power Issues
  - 4.1 Gender and Power in Media    4.2 Gender and Power in Politics
5. Politics in Media-saturated Societies
  - 5.1 Politics as Entertainment    5.2 Television News and Audience Research
  - 5.3 Audiences and Politics    5.4 Election Night Broadcasts

Chapter 3. Methodology

1. Methodological Considerations for Media Literacy Research
  - 1.1 Qualitative Research and Research Contexts
2. Research Design
  - 2.1 Workshop-centred Research    2.2 Setting
  - 2.3 Location and Context    2.4 Language
3. Participants
  - 3.1 Sample and Size    3.2 Informed Participation    3.3 Labelling and Demographic Data
4. The Workshops

- 4.1 Role of Researcher/Facilitator    4.2 Introduction to the Workshop
- 4.3 Participants' Connections to Media and Politics    4.4 Analysis of Texts
- 4.5 Post-viewing Questions
- 5. Follow-up Interviews
  - 5.1 Purpose    5.2 Questions
- 6. Data Collection
- 7. Analysis Method
- Chapter 4. Results and Analysis
  - 1. Previewing Questions
    - 1.1 Previewing Question 1    1.2 Analysis of Responses to Pre-viewing Question 1
    - 1.3 Pre-viewing Question 2    1.4 Analysis of Pre-viewing Question 2
  - 2. Results from Participants' Analysis and Discussion
    - 2.1 Sound techniques    2.2 Visual techniques    2.3 Representation of people
    - 2.4 Text Styles    2.5 Related topics    2.6 Analysis of Workshop Results
  - 3. Post-viewing questions
    - 3.1 Post-viewing Questions    3.2 Analysis of Post-viewing Questions
  - 4. Follow-up Interviews
    - 4.1 Group A: Interview Results    4.2 Group B: Interview Results
    - 4.3 Group C: Interview Results    4.4 Group D: Interview Results
    - 4.5 Analysis of Follow-up Interviews
- Chapter 5. Discussion & Conclusion
  - 1. Discussion
    - 1.1 Summary of the Chapters    1.2 Main Findings    1.3 Limitations of the Research
  - 2. Conclusions
    - 2.1 Summary of the Conclusions    2.2 Contribution to the Field
  - 3. Further Research
    - 3.1 Potential Applications    3.2 Future Research

## 2. 本論文の要旨

本論文はメディア・リテラシーの学びの理論と実践に基づいたオーディアンスに関する質的研究を提示するものである。京都とオーストラリアで行ったメディア・リテラシー・ワークショップとワークショップの参加者への面接調査をもとに、メディア・リテラシーの文脈における「クリティカル」の意味と、オーディアンスのクリティカルな視点とは何かということについて考察を試みている。民主主義の広範な目標につながる対話を促進するという理由で、クリティカルな視点はメディア・リテラシーに不可欠な部分であるが、本研究においてオーディアンスはメディアの能動的な読み手として、また民主的な権利をもつ市民として概念化される。ワークショップと面接調査の結果、本研究ではメディア・リテラシー研究の文脈において、「クリティカル」が個人によって異なり多様で複合的な意味をもつことが明らかになった。クリティカルな視点によってオーディアンスはメディア権力をより深く読み解くことが可能になり、ワー

クシヨップによって参加者が互いにアイデアや意見を共有すると同時にメディアとの個別のつながりを認識することが可能になる。本論文では、このことから多様な視点を共有することは民主主義にとって不可欠であり、メディア・リテラシー・ワークシヨップはオーディエンスがクリティカルな視点を強化し広げる機会を提供するものであると結んでいる。

以下に本論文での各章の概要を記す。

第1章では、研究の目的・定義、問題意識、アプローチの方法、本研究の基本となる用語の定義について述べている。本研究の目的は、メディア・リテラシーの文脈における「クリティカル」の意味を考えると、選挙番組のジェンダー・リプレゼンテーションにみる権力関係をオーディエンスが分析することを通してクリティカルな視点がどう構成されるかを検討することである。本論文で基本となる用語に関しては、鈴木みどりのメディア・リテラシーの定義を採用し、「クリティカルである」ということは、メディア・リテラシーの重要な目的であると述べた上で、本研究では、オーディエンスのクリティカルな視点到に注目することを説明している。すなわち、本論文では、オーディエンスは受動的なメディアの受け手ではなく、アクティブな読み手であること、また同時に消費者であるよりもむしろ洗練された市民であり、民主的な権利をもつ市民であるということも強調している。本研究では、メディアが構成する政治を様々な視点から検討するため、異なった地理的な立場から特定の問題を探究しようとする反地域研究のアプローチをとっている。そうすることによって、メディアによるジェンダー、権力、政治の構造を異なる視点でみる事が可能になるとしている。

先行研究をレビューした第2章では、5つのトピックにまとめられている。まず、レン・マスターマン、デビッド・バッキンガムやソニア・リビングストーンなどの研究をもとに、メディア・リテラシーの民主的な目的についてまとめ、次に、クリティカルとクリティカルな視点の重要性、すなわち、メディアに対してクリティカルな姿勢を持つことは民主的社会的強化につながるということについて論じている。3番目には、デヴィッド・モーレーの先駆的研究にふれつつ、先行研究におけるオーディエンスの概念化に注目している。その多様性ゆえに、オーディエンスの定義と分析について述べることは容易ではないが、本研究ではオーディエンスがしばしば研究において「メディア消費者」として捉えられるという問題意識の上に立っている。そして4番目に、先行研究におけるジェンダーと権力の問題、特にメディアと政治との関連のありかたを検討し、ジェンダーがメディアと政治の研究にとって決定的に重要なものであるとしている。最後には、メディア社会における政治について、特にテレビ・オーディエンスと政治についての先行研究(Philo and Berryのパレスチナ紛争のニュースに関するオーディエンス研究、Oatesのロシアの選挙とテレビ・オーディエンスの研究など)を参考にしながら、検討している。

第3章では、メディア・リテラシーと質的研究について、方法論に関する先行研究のレビューも行いつつ、メディア・リテラシー・ワークシヨップのためのグループの作成やテキストの選択についての方法論を述べている。まず、研究のセッティングや場所、文脈、言語の問題といったリサーチデザインについて述べた後、参加者、ワークシヨップ、事後面接調査、データの収集と分析の方法について説明している。メディア・リテラシー・ワークシヨップは、京都とブリスベンで4グループ(2つのコミュニティ・グループと2つの大学のグループ)に行い、事後面接調査は24人の参加者に対して行っている。ワークシヨップは、テキスト視聴前の質問、テキスト分析、テキスト視聴後の質問という3部で構成されている。使用テキストは、2003年の日本の総選挙報道と2004年のオーストラリア連邦議会選挙報道から抜粋された

ものである。事後面接調査には semi-structured approach（ワークショップでの反応と、事前に準備された質問とオープンエンドなディスカッション）を用い、参加者にクリティカルの意味をどう考えるかや、参加者の背景について質問している。録音されたワークショップと事後面接調査は、文字起こしを行い、データは open-coding method（参加者の発言記録からパターンとカテゴリーを特定する方法）を用いて分析されている。

第4章では、4つのワークショップと24の事後面接調査の結果と分析を示している。テキスト視聴前の質問「メディアとどうつながっているか」「政治とどうつながっているか」は、参加者にメディアと政治と自分たちとの関係を考えてもらうものであるが、この質問への反応は、人口統計学的データ（や一般化）は必ずしもオーディエンス性や市民権を明らかにできるとは限らないことを示した。そして、参加者がワークショップの焦点を、ジェンダーだけでなく、年齢やエスニシティのリプレゼンテーションへも広げたと考察している。視聴後の質問では、参加者が編集者やプロデューサー、広告主のようなメディア組織のなかの特定の役割に権力があると考えたことが明らかになった。ワークショップ後に行われた事後面接調査では、参加者の背景、経験、視点を再確認しつつ「クリティカル」あるいは「分析的」になる動機や「クリティカル」の意味、自分たちと民主主義の関係について質問している。結果については論文中に詳細に記述されているが、参加者の反応は、社会や文化、集団のなかで「クリティカル」が多様で複合的な意味をもっていることを示されている。ワークショップは参加者たちが個々のメディアとのつながりを認識し、互いに考えや視点を共有する機会となったが、結果としては「クリティカル」が多様で複合的な意味をもつこと、クリティカルな視点によってオーディエンスがメディア権力をより深く理解できることが示されている。

第5章はワークショップと面接調査の結果について考察し、そこから得られた本研究の結論である。すなわち、メディア・リテラシーの文脈では、「クリティカルである」ことは単にメディア・リプレゼンテーションのステレオタイプやバイアスを識別することではなく、クリティカルな視点はジェンダー、年齢、人種、社会経済的階級、エスニシティなどのマイノリティの視点の認識をもたらすこと、メディア・リテラシー・ワークショップはメディアとのつながりを認識させ、参加者のクリティカルな視点を強化し広げる機会を提供すること、メディア・リテラシーの学びは有意義で共同的な対話をもたらすこと、である。そして本論文では、グローバルなメディア社会におけるオーディエンスの個人的な経験を認識することは有益であり、「クリティカル」はメディア・リテラシーの学びとそれを超えたところに、変化をもたらすクリエイティブな可能性があるかと結んでいる。

### 【論文審査の結果の要旨】

2008年7月3日に産業社会学部共同研究室にて行われた公聴会に引き続き、審査委員会を開催した。審査委員会では公聴会での質疑応答をもふまえ、著者の論文について審議し、評価できる点と若干の問題点を明らかにした。審査の結果は以下のとおりである。

本論文は、従来のメディア・リテラシー研究において注目されることの少なかったワークショップとその参加者であるオーディエンスに焦点を当て、メディア・リテラシーの研究領域のキーワードである「クリティカル」の意味とオーディエンスのクリティカルな視点の獲得という問題に取り組んだ研究である。本論文では、著者のきわめて明確な問題意識を出発点として、両国におけるワークショップ開催、データの収集方法と分析方法などのリサーチ・デザイン、分析結果が適切に記述され、議論が展開されており、

